

# 元仁宗皇帝聖旨碑の白話について

『長田夏樹論述集（上）』第1章

（原載：『神戸外大論叢』第1巻第1号，1949年6月）

この論文は、元延祐元年（1314）7月28日の日付を持つ盤屋重陽万寿宮アユルバルワダ（仁宗，Buyantu qaγan）聖旨碑を対象として、そこに記された中国語の語彙について考察したものである。パスパ文字モンゴル語のローマ字転写と漢文面の移録を示したのち、“毎”、“裏”、“的”、“來”、“者”、“呵”、“休”、“麼道”等の白話語彙を取り上げ、対訳のモンゴル語を援用しつつそれぞれの機能を分析している。それまでの蒙漢対訳聖旨碑の研究が専らモンゴル史・モンゴル語研究の立場からなされていたのに対し、本論文では最初から中国語を問題にしており、「蒙古語との対比によりそれらがいかに用いられているか、その文法的機能を考究し、元雜劇その他元代白話文学の解明に一つの方向を考えてみよう」との意図で貫かれている。

蒙漢対訳碑文の中国語については、その後太田辰夫「漢児言語について—白話發達史に関する試論—」（『神戸外大論叢』第5巻第2号，1954）や田中謙二「元典章における蒙文直訳体の文章」（『東方学報京都』第32号，1962）などにおいて取り上げられ、特に後者がこれを『元典章』の文体を解明するために利用したことにより、この方面の研究は長足の進歩を見ることとなったが、本論文はその嚆矢となった論考と言えよう。

また、個別の分析にあっても随所にユニークな指摘が見られる。例えば、現代中国語における二人称の敬称“您”をめぐって、“你老”という敬称が“你納”“您納”となり、“納”が失われて“您”になったとする説を否定するとともに、『元朝秘史』を根拠として二人称複数が敬称に転化したと主張する点や、“的”の文法的機能と意味を整理するにあたり『清文接字』（1866）、『清文虚字指南編』（1885）といった清代の満洲語文法書を用い、満洲語とモンゴル語を対比しつつ論じる点などは、今までなされてきた中国語の解釈が「ほとんど中国語官話方言の知識のみによって、しかも何ら歴史的な・方言的な考慮がなされずに行われたと言っても過言ではない」とする主張を体現したものと言える。

なお、本論文の後に出了た同碑文の釈読には、蔡美彪『元代白話碑集録』（科学出版社，1955，第64，漢文面のみ）、N. Poppe, *The Mongolian Monuments in hP'ags-pa Script* (Otto Harrassowitz, 1957, plate II)、照那斯因『八思巴字和蒙古語文献 II・文献彙集』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1991，第9）などがある。

（竹越孝）